

人口資質問題をめぐる生活人類学的展望

篠崎 信 男

1) はしがき

人口資質に関する形而上学的詮索については既に「人口問題研究、第93号」に記載済みであるが、本稿は主として人類学との接触面への課題を探究せんとするものである。人口問題も実際問題としては人類の生存する限り存在したであろうし、人類学も、これらの集団生活の実態からその研究は古くからあったに違いないが、学問の体系としては人類学の方が早くからその軌道に乗っていたことは疑問の余地がない。またその方法論的体系にしても、民族学よりもかなり明確なものが打ち出されていたことは、故東大教授の杉浦健一氏も認めていたところである。従って現実の諸問題として投げ出されている人口資質の諸面への接近が人類学的に可能であるかどうか、また可能であれば、それは如何なる人類学的思考路線を経て、如何なる形で実現するのが望ましいかということが反省されねばならないであろう。

しかし、このためにはいやでも一通りは人類学というものの成立過程、その概念構成及び、そもそも人類という言葉自体への認識論的思考をも照合しなくてはならなくなってくる。従って本論は人類学に関する文献、主として長谷部言人博士の「人類学総論」に盛られた内容を中心として推論展開を試みようとするものであるが、更に Martin の idea や Kluckhohn の「Mirror for Man」等その他関係ある文献をも参考とすることにした。というのも人類学と称するものへの考え方が多方面に亘っており、更にこれを人口問題へと結びつけたいという筆者の志向に基づくものであるからである。長谷部博士によると「人類」という言葉は、日本では1650年頃、長崎に「万国人物俯瞰図」という巻物があり、其処に、いろいろの人間の形態が図示されて、その説明文の中に始めて「人類」という文字が示されているという。それ以前にはこの言葉は未だ見当たらないというから、この時期が人類という文字の始まりではないかと思う。従って人類学とは極めて近世に関する学問ということで現在、考えられ研究されている人類学の内容とは少々ずれがあり不適當であると博士も言われていたが、実は人口問題にとってはむしろこの方が本義的で適合してもいる。

また奇しくも東京大学理学部に人類学科が創設されたのは昭和14年2月であるが人口問題研究所が厚生省に設立されたのも昭和14年8月であった。その後26年を経過したが、これら研究体系が今までの諸々の研究実績から見て結びつき得ないということはある得ないと思うのである。しかし今日、分化した諸科学も、それが細分化すればする程、学問的体制としては疎隔になって来ることは否定すべくもない現状であるが、幸にして人類学にも人口問題にも広い視野があり未だ動脈硬化的に固定していないことが、一方は自然科学的思考、一方は主として人文科学的思考の下に発展して来たにも拘らず、問題が“人間集団”というものを対象としていたため多くの接触面と共同研究路線を提供してくれる可能性を持っているといえよう。私の野心もまた斯る可能性の中にあるとあってよい。長谷部博士も人類のその時代における終極の姿が人口問題として露呈して来るものであると言っていたが、一方はその源を尋ねて過去へと赴き、一方はその結果、または一相として現実_ニにそれを展示し、そしてともに未来に対する人の行方を見極めんとすることにおいて共通のものを抱いているといってもよか

ろう。人類学教室の創始者であった故坪井正五郎博士は“what, how, why”という命題で追求しようとしたし、Linnéも“汝自らを知れ”という言葉で人類学を評したといっている。

2) 人類学の体制とその周辺

Anthropology という言葉は“Leiblich”というラテン語に1501年始めて見られているが、これはAnatomyの意味に用いられていたものである。ドイツのMartinの“Lehrbuch der Anthropologie”の冒頭に書いてある言葉は“Die Anthropologie ist die Naturgeschichte der Homíniden in ihrer zeitlichen und räumlichen Ausdehnung”であった。そして人類学は“Gruppenwissenschaft”であり、Menschliche Anatomie Physiologie……であることが記されている。勿論Martinも人類学が非常にいろいろの意義で夫々の学者に概念付けられていることを述べているが、“Wissenschaft vom Menschen”であることには変りはなく、ただこれを如何なる立場、如何なる道から探究して行くかについて異っており、例えば哲学者のKantやFichte, Fries, Chavannes等も人類を心理学的教育学的に研究した人々であり、その他多くの自然科学者や医学者によっても行われている。

しかしMartinはこれらを含む広義の人類学の定義を切り離し、狭義の意味で“Physische Anthropologie”の体系を整えたのである。だが彼の言う二大命題、“Tatsachenforschung”と“Ursachenforschung”は必然的に“Psychische Anthropologie”又は“Ethnologie”若しくは“Völkerkunde”と係り合を持つことになって来たのである。しかしながら広義の所謂“Völkerseele”までは及ばなかったといつてよいであろう。だが一応次の事項は将来の課題として彼の概念構成の中にはあったことは確かなようである。即ちEmbryologie(発生学), Physiologie(生理学), Pathologie(病理学), Psychologie(心理学), Hygiene(衛生学)―特にSozialhygiene(社会衛生学)で更にGeographie, Ethnologie, Prähistorie, Geologie及びPäläontologieとの関連である。従つてこの考えは長谷部博士の“身体人類学”と称するものと対応するもので、此処に人類学の体系化が狭義ではあつても方法的に意義付けられてきたといえる。

だが英国では人類学を“The science of full nature of man”という考え方がJ. Huntによって1863年言われ、これは“人の理学”と解すべきもので、今日scienceを科学と訳してしまったことは何んとしても残念なことだと筆者は人類学については特に考えるのである。というのも、集団概念の入つたこの学問が細分化的色彩の意味の濃い科学ということではその研究意義が誤解される恐れなきにしも非ずであるからで、その方法は解析的であっても、その学びの“すぢ”は“理”のものであるからである。Francis Galtonは人類学について、“The study of what men are in body and mind, how they came to be what they are and which the race is tending……”といい、この考えが故坪井博士のアイデアとも関連を持つものと思われる。が、一方フランスではP. Brocaが“l'histoire naturelle du genre humain”として一般と特殊の問題に分けて述べていたようである。

アメリカの人類学に対する概念は必ずしも明確ではないが、Kluckhohnは他の諸科学との区別上、人類学を“basic anatomical and cultural likenesses and differences”を扱う分野だとし、むしろ自然科学としてよりも社会科学の領域の問題として考えているようであるが、ただ興味あることは他の社会諸科学が何等身体について考慮しないのに対して彼は唯一の特徴としてanatomicalな概念を導入していることである。しかしアメリカ人類学の主な流れはやはり文化的概念でありnatureに対するCultural Anthropologyの展開となっている。

しかしKulturという概念はドイツの哲学者W. WindelbandやH. Rickert等の価値哲学や文化哲学を通して打ち建てられたものであるが、それが人類学の分野においてアメリカ的に具象化され

て来たことは興味ある事実と言わねばならないであろう。従って人文科学系統に立つ先史学、及び考古学からの人類学への発言は、広義の意味での人類、つまり文化を持っている生物としての理解の上に立っていることになる。

人類学に対する定義や目的については文化的方向を取るにせよ、自然理学的方向を取るにせよ人類の生活史を前提としてまたは基盤としてその集団を探究していることは事実である。長谷部博士の定義によれば

「人類 及びその中にある色々の群について、体、及びその部分、形状、構成、また個々、及び総合現象を色々の群について明らかにする。次に色々の群の間における差異を明にし、色々の集団が現在どういう工合に変わりつつあるか、どういう変化を経て来たか、またどう未来変るかを論ずるものである……」ということである。Martin もこれと大同小異のことを述べているが、いずれにしても人間集団の異同、及びその変動ということが問題となるという点では人口問題の研究対象と極めて類似しているといわねばならない。ただ方法論として、其処への突っ込み方が、いろいろ原則論によって異っているという外はなかろう。人類学の体系については既に身体性の問題についてはかなりの輪廓付けが試みられているが、1939年頃一般に考えられていた体系は、1) Allgemeine Anthropologie 2) Spezielle Anthropologie 3) Anthropographie でこの 3) については別名 Anthropologie der einzelnen Gruppen oder Typen とも言われるものであった。

特に 2) の範囲として morphologisch, physiologisch, pathologisch, psychologisch のものが考えられ、この形態学的なものの中に Lebenden と skelett があり kranologie も含まれていたようである。Martin は四肢の問題についても始めて手がけている。従って筋肉とか血管等の問題をも研究されてきたが、この方面の人類学的研究も Schwalbe や Fisher などによって行われており、日本でも故足立文太郎博士が体質の研究として実績をまとめていた。長谷部博士はこれらを一括して軟部人類学という名称で呼称していたが、当時 Martin も其処までは人類学の範囲を拡大しようとしなかったもので長谷部博士が考えていた体系の中には次のものが分類されている。すなわち Anthropologie der natürlicher Gruppen oder Typen として, geschlechtsgruppen によって分けて攻究するものも含まれ、所謂性人類学とも呼ばれるべきもので、次が altersgruppen によって分けられるもの、つまり年齢人類学とも直訳出来よう。次に Konstitutions typen によって行われるものである。一応これを体質と呼んでいるが、むしろ今日的表現としては体位的の意義の方が強いように思われる。更に Blutverwandten (血縁) や Zwillingen (双生児), Mischlingen (混血) 等も考慮しており、また Anthropologie der Rassen として Völker という概念, Nationen という概念即ち前者は同じ文化団体、後者は政治的団体としてのものをも含んでいたように思われる。

次に長谷部 idea として特記すべき考え方は Anthropologie der sozialen Gruppen oder Typen としての内容のものである。この中に Bevölkerung として“人口問題”を打ち出しており次に Siedelung として住居によるもの、Berufsgruppen として職業によるもの、Sport-typen として運動によるもの、次に Immigrante (移住) のもの、Verbrecher (犯罪) のもの等が挙げられており、これらが所謂 Eugenik と関係して来るということであつた。たまたま昭和34年1月刊行の民族学研究第22巻第3・4号に長谷部博士の“人類学の体制について”の論文が載っており、その全貌を知見することが出来たが、20年以上経ても博士の基本的理念には変化のないことを知ったのである。ただこの中で当時余り強く概念として打ち出されていなかったものであつたが、今日少々具体性を持って強く新しく打ち出されて来た事項に「人類働態学」が示されていることが注目を引いた。恐らく原語はその後の研究の積み重ねによって実績が示されたものと思われるが“ergology”という考え方であろうと

思われる。つまり erg は力学のエネルギー概念より発したものであるが、この“働”という字は故橋田邦彦博士が述べていたように完全なる日本語である。かくして此処に生活に即した文化史的探究への手がかりが生じたといってもよかろう。というのは斯くの如き人類学がその軌道に乗る時、人口資質問題の研究方法論に始めて人類学的研究がマッチして来たことが言えるからでもある。戦時中は経済人類学とでも言うべきものの考えも時々筆者に洩らしていたことがあったが、この“働態”こそ実は人口問題的には生活的な意義に通ずるものがあり、これはまさしく接触面であると考えられるものを持っていると思われる。最近「人間工学」や「分子生物学」なる学問が発展して来たようであるが、これらの具体化はやはり働態として生活場の中に求められねばならないであろう。このことは人類学が単に group type 以外に group behavior として機能理論への志向を示したという点で重大なことだと思っている。

此処で人類学に関係あると思われる人々及び学会、研究所、博物館等について歴史的に回顧して触れて見ることにする。

人類学的記載としては既に Hippokrates や, Aristoteles の時代に人間の変異についての問題や、定義などが出ており、また芸術品として、アッシリア、バビロニア、エジプト等の資料が人類比較等に供せられていたようである。しかし、実際的な科学的資料や素材は、Marco Polo に始る異国人に関するもので特に17~18世紀に非常にこの問題が拡大されていったのである。Linné (1707~1778) やBuffon (1707~1788) もこの方面で活動した人々である。

一方人間の血統や Primaten との類似性の問題も C. Galenus (131~201) によって、その内部組織について研究されてもいた。しかし Anthropomorphen の解剖を取扱ったのは E. Tyson (1651~1708) によってであり17世紀である。しかし、本格的に論議されたのはやはり18~19世紀で、特に J. F. Blumenbach (1752~1840) が彼の論文“Uber die naturlichen Verschiedenheiten im Menschengeschlecht”を発表し、人類学的研究に対する最初のしかも概論書となったため、一般に人類学の創設者と考えられているようであるが、これと平行して S. Th. Sömmerring(1755~1830), J. Hunter (1728~1793) 及び P. Camper (1722~1789) 等の研究者も人間の体型について計測等を行いその異同等について研究していた。従って長谷部博士によれば Blumenbach は、自他ともに人類学者として自覚していたのではないといっている。これを裏付けるかの如く Ch. White(1728~1813) は最初に価値ある Somatometrischen の研究を遂行していたし、この外 J. C. Prichard (1786~1848), Natt (1804~1868), Gliddon (1809~1857), F. T. Waitz (1821~1864) 等の研究者の名前も出ているわけである。

かくして19世紀に入って人類学の研究団体は次々と誕生して盛んとなって来たことがうかがえるのであるが、1800年代に設立された学会、研究団体、博物館等を列挙すれば次の如くである。

1822 ; British Association for the advancement of science, Section of Anthropology

1832 ; Histoire naturelle de l'homme of Muséum de Paris

1839 ; Société Ethnologique de Paris

1843 ; Ethnological Society of London

1850 ; A Museum of ethnology in Hamburg

1859 ; Societe d'Anthropologie de Paris

1863 ; Anthropological Society of London

1863 ; Kaiserliche Gesellschaft der Freunde der Naturkuude, Anthropologie und Ethnologie in Moskau

- 1866 ; Peabody Museum of Archaeology and Ethnology at Harvard
- 1867 ; Congres International d'Anthropologie et d'Archeologie Préhistorique, Paris
- 1868 ; Societa Italiana di Antropologia Etnologia e Psicologia Comparata
- 1869 ; Berliner Gesellschaft für Anthropologie, Ethnologie und Urgeschichte
- 1870 ; Deutsche Gesellschaft für Anthropologie, Ethnologie und Urgeschichte, mit zahlreichen Lokalvereinen
- 1870 ; Anthropologische Gesellschaft in Wien
- 1870 ; Münchener Gesellschaft für Anthropologie, Ethnologie und Urgeschichte
- 1871 ; Societa Italiana d'Antropologia e di Etuologia, Florenz
- 1873 ; Svenska, Sällskapet för Antropologi och Geografi, Stockholm
- 1873 ; Royal Anthropological Institute
- 1879 ; Anthropological Society of Washington
- 1879 ; Bureau of American Ethnology
- 1881 ; Societe d'Anthropologie de Lyon
- 1882 ; Societe d'Anthropologie de Bruxelles
- 1884 ; Anthropological Society 東京
- 1885 ; Congrès International d'Anthropologie Criminelle
- 1886 ; Anthropological Society of Bombay
- 1888 ; Russische Anthropologische Gesellschaft in St Petersburg
- 1889 ; Gesellschaft Deutscher Naturforscher und Ärzte
- 1893 ; Societa Romana di Antropologia, Rom
- 1893 ; Anthropologische Gesellschaft der K. Militärmedizinischen Akademie in St. Petersburg
- 1895 ; Societe des Americanistes de Paris
- 1895 ; Royal Anthropological Society of Australasia, Sydney
- 1898 ; Niederländische Anthropologische Vereinigung, Amsterdam

以上32の研究団体が世界で数えられているが1900年代に入っても更に10以上のものが誕生している。従ってヨーロッパにおいて隆盛を極めていたことは彼等の植民政策と無関係ではないように思われる。各国に盛んになってきた人類学は次第に連繫を強めて来たが、最も systematic になったのは Physical Anthropology の分野である。以前はこの言葉を体質人類学と呼称していたが、現在は形質人類学とっている。言葉の問題であるが形態と資質という意を兼ねたものようであるが長谷部博士は身体人類学という名称を使用していた。しかし、問題はその方法論で、まちまちの計測をしていては国際比較、協調が出来ないうらみがあり、Kranio-Methodistisch Konferenz が1877年ミュンヘンで開かれ協定が成立し、次いで1884年フランクフルトで行われた時は頭蓋骨計測法が更に正確に協定されたものである。これが世に Frankfurter Verständigung として知られているものなのである。斯くして国際協調がなされ、Physical の面では研究が一段と進行してきたが、1906年の第13回会議では若干の改定がなされた。これを Monko-Konferenz の Schadel körper の協定と呼んでいる。更に1912年にジュネーブで会議が開かれ、この時始めて Lebende-Messung の国際協定が成立し生体人類学は始めて国際的に活発になって来たのである。この大綱が Martin の Lehrbuch ともなったので

あるが日本ではこの協定以前に故小金井良精博士が生体計測を行っていた。明治21年当時は現代使用しているような計測器がなかったため苦心されたらしく、三角定規や骨盤測量器などを使用していたようである。それでも満州人の計測値などは現在の精巧なる計測器で行なったものと大差ない値が出されていたことを筆者は知っている。1938年コペンハーゲンで会議が持たれ更に従来の計測法についての検討がなされている。しかし現在でも生体計測点については骨格計測と異なり問題が残され特に Nasion（鼻根正中点）の設定はこれを基点として鼻高、形態学顔高を計測するため常に問題とされるし、また形態学耳長なども軟部であるだけ、その計る角度によっては問題となろう。また腸骨棘高の計測の Iliospinale. ant の決定などいずれも熟練を要する計測である。近時人類学を学んだものが生体計測さえも出来ないようでは果して人類の基礎的方法論さえも分らないのではないかと思われる。

人類の自然理学的研究は、Ethnologie や Prähistorie と関連を持ちながら、猿や類人猿の骨格との比較において、その差異と類似性が細密に研究され、特にある識微が第一義的なものか、第二義的なものかをさえ次第に判明してきたのである。特に人類に特徴的な事例を二、三紹介すれば、下顎骨の神経の通る穴の数やその穴の角度、5本の指が一つに結着出来ること、頭蓋骨量の大きさ（人間は男1450cm³、ゴリラ508cm³）また脛骨の彎曲度、その彎曲の位置など猿や類人猿とは異っている。軟部においても完全なる横隔膜が出来ているのは人間である等……諸多の点においてその異同が論ぜられ、これらの諸問題は筋肉との附着、肺の機能といった所謂“働”的なものへの問題提起を示す基礎的課題とあってよいのである。またこのような Konstitution の状態や形態は特に脚体においては猿は第二義的に固定化しているが人間の場合は Neutral でこれから変化し得る可能性のあることなども示唆され得るといった進化問題とも結びついて行く。従ってこれらの研究成果は人口資質の基本的要素たることを失わないものであろう。また人類と目される人骨の発掘も盛んになり、現在までに54カ所以上から発見、大体、ヨーロッパのベルギー、フランスを中心にしてドイツの西方からイタリー、バレスチナ、クリミヤの諸方面に見出され、時代は寒氷期の後期から氷河期の後期にまたがっている。この外ジャバや中国からも発見され、人類自身の大きな史の変遷が次第に輪廓付けられていっている。以上のことは人類の系統発生に関する生物学的研究として極めて重大な自然史学的な基礎構造の根源であろう。これに対し人類がその時代、環境に応じて様々な暮らし方を行ったことによって、それが身性にいろいろの変形、影響を及ぼしていることも見逃せない事実である。たとえば抜歯の習慣とか耳に穴をあけるという風習などがある。しかし此等は一括すると Obligoismus ということと関係付けられて行く問題で、すなわち、ものをしぼるという文化である。長谷部博士はこれを結縛文化と呼称したが、古代のペルー人は頭を縛るために、deformation を起こしているし、かつての中国のてん足もその例に洩れない。特に身体に耳、目、口、陰部、肛門等の穴があることから、これを縛るという風習は同時に、縛るために逆に穴をあけるという風習と同義のもので、つまり結縛することによって身体を強くすると考えられたからである。従って頭蓋骨に穴をあけて病を追い出すという習慣なども南米では盛んに行われていた。しかし、しぼるという風習は身体にのみ限ったわけではなく、自分の所有物に対しても行われている。今日水引をかけたり、しめ縄、はち巻き等凡べてこの文化意義を持ったものが現代に持ちこされているとあってよい。耳かざり等も単に虚飾から起ったものではなく、耳の穴を縛るという象徴で、これをつけることによって耳から悪魔が入ることを防ぐという本義から起ったものである。これらを南洋では Tatan などと叫んでいるが、この Ta とは叩く意であり、特に入れずみなどは英語でも Tattoo という。南方でも Tatarren と叫んでいる。つまり入れずみは叩いて入れるものということの意であろう。これも本来は結縛文化から来ているものといわれ

る。すなわち建築などで縛って家を建てると、この縛った結び目が一つの模様になり、後でこれを象型的にかたどってこの模様を木に彫み込んだとされている。その彫み込みが身体にほどこされるようになったのが入れずみとなったのである。

次にもう一つの文化形態は Opfern である。すなわち体の一部を切り取るということで、小のものを犠牲にし大のものに捧げるという意義のもので、たとえば髪や毛を切る、ひげを切る、手の爪、指の先、Penis、睾丸、Schamlippen、Clitorisなどを切る、抜歯、または歯をすり取ることも凡てこの部類に入るものである。神に供物を捧げる奉納といった考えもこの風習の名残りといえよう。

上記の如く、この Obligois と Opfern は原始未開民族にあっては身体と健康と幸福な生活をするための文化行事でもあったのである。今日でも医学手術は切り取るということに第一義とし、あとは結び合わせるという手術に終始していることも蓋し偶然ではないのである。これが様々な deformation を示すことになるが特に頭部に穴を開けたりすることは日本ではこれを行ったという確実な資料は未だないが斯る身性文化は何等かの意味で現代との係り合いを持っているといえてよい。

しかし、これも“生活”というものを通してであるが、その生活実体は知る由もないのである。ただ、生活用品として使用した遺物が発掘されることから推測することが唯一の手がかりとなるわけである。ヨーロッパでは石器が多く出土されるので、これを中心として研究がなされるが、日本ではむしろ土器の方が多く発掘、発見されている。石器、土器そのものについて詳述する暇はないが、先史学と考古学との区別を明確にする必要はあろう。以前は Prehistoric archaeology であったがヨーロッパに二つの流れがあり、一つは南ヨーロッパの研究（ギリシャ、古代ローマ等）で他は北ヨーロッパ、主としてスカンジナビヤ諸国の研究で特にデンマークの生物学者や自然科学者が始めたものであった。従って前者は18世紀より始められた発掘遺物に関する研究で建築史家や美術家などがこれに参与したのであるが、後者は貝塚が自然か人為かの研究から始まって此処にドルメンの研究が起ったのである。つまり一つは歴史家、他は自然科学者が主体となり前者が考古学を形成して行ったのである。いずれも古代人の生活に関する研究が第一義的のもので、具体的にはその痕跡遺物を中心資料として探究するのであるが、先史学は自然と人間、及びその人間の文化を総括的に研究したのに対し、考古学はある時代の文化を主として取り、その文化を作った人間または人間を作った自然に対して無関心となってしまったのである。従って考古学者は文献のない、伝説の残っていないものについては最早研究無能となる。ということは自然環境というものに対して分らないことになるのであるが、先史学はその何もない所謂歴史以前のものの研究ということで、要約すると、① Prehistoric Age ② Protohistoric Age ③ Historic Age に分れ①が先史学となり②③がarchaeology となったといえる。石器の始まりはフランスの僧侶であった Pablei Bourgois という人が Thenay の Loir-et-cher という地方で中新世時代 (Miocene) の石片を拾ったことから、これが人工品か否かを決するため1867年パリに開かれた人類学国際会議に提出したが決定せず、更に1872年ブラッセルで開かれた国際会議に再び提出したのである。15人の委員の中9人が人工品なりと決定したことから石器の発掘研究は盛んとなって来たわけである。しかし日本でも木内石亭(1724~1808)が既に石器の人工品を説いていたがモールス氏の1877年の大森貝塚の発掘によってこれが研究は一段と盛んになって来たことを挙げるに止めよう。

むしろ日本では土器の方がはるかに多く出土し、その研究も進んでおりこれによって研究する方が有利となっている。大別して縄紋土器と弥生式土器になるが、この間に文化的変遷があるといわれ、縄紋土器時代は漁獵採集生活者であり、弥生式土器時代は大陸との交渉が行なわれ、農耕生活者であるということは重要なことがらであろう。ただ此処で注目し問題にしたいのは縄紋土器の頸部の模様

帯である。これが古いものの文様はきれいな模様状を示しているが、これが新しくなるにつれて単純化し文様が直線化していること、また土器の体部の模様にしても同様な傾向があるということは、所謂、文化の平準化という意味において筆者はこの時代の生活者の集団生活において何かがあったという示唆を受けるのである。弥生式になると一段と明るい色で、しかも農耕定着性を示しており、道具も石器から青銅器、鉄器に変化していることがあげられよう。また土器の形でも底が平なもの尖ったものなどこの器の使用し方、置き方に関係し当時の生活のあり方に対し一つの示唆を与えていることも見逃せない。更に日本全土における出土土器より見て縄紋土器時代に本州においては捺型文系は九州方面より北方へ、条痕系の土器は北海道から関西方面へ、羽状型の縄紋土器も同様の分布傾向を示している。ところが爪型の縄紋系になると再び九州方面から北方へと走っており条線状文系も南からである。そして隆線文系と捺消縄文系は北海道を含めて日本全土に等しくある。ということは少くとも、二度日本文化は統一均衡を保ったことがあったと考え得られよう。そして末期に再び東北地方を中心とした亀岡式土器が南へと向っている。しかし斯る文様系の見解に対して批判するものもあるがこれら土器文化論に対しては長谷部博士はかなり批判的見解を持っていたようである。新しいものが発掘されるたびごとに文化体制論がぐらつくようでは体系的理論化も時期尚早ということでもあろうか、従って凡ゆる遺物を総合してその動向を述べるということにつぎるのではないかとも思う。たとえば南洋のミクロネシア、ポリネシア人の移動形態にしても、単に血液型のみ分布から、ある一定の路線を明確化そうとする見解に対して諸多の遺物、身体計測、風習等から必ずしもこれと一致せず古畑種基博士の見解と一致しないという態度を長谷部博士が取ったことなどその一例となろう。

人類学が遠古の時代よりの人群を対象とする学問であるため広汎な研究分野を包含しなければならないことは当然であるが、其処に常に忘れられざる概念は“生活”という場なり機能である。これは必ずしも物質物件学的には実証することが出来得ない命題であるが、またこの概念こそが implicit のものであれ、explicit のものであれ、人類を研究するものの自然理学的研究面と文化的研究面との接触面であるという意味において、筆者は重大な人類学的要因を持つた研究命題だと思わざるを得ないのである。

3) 文化人類学的諸問題

文化人類学は主としてアメリカを中心として勃興している。というのもアメリカ社会を構成する人々それ自体が人類の寄合世帯であり、単なる一方的理論では現実と合致しないうらみがあるのではなかろうか。此処に社会的センスの入った人類学的研究コースが取られ、これは必然的に文化という総合概念によって統一されていったと見られる。しかし完全にヨーロッパ的な人類学と別なものを取るということではないと思うのである。むしろ既にドイツの E. Meyer (1855~1930) は文化人類学について“人類生活及び発展の一般的形式に関する学問である”といっているのを受けてそれを土台にしながら、主として応用人類学的方面を開拓したといえるのではなかろうか。

従ってこれが持つ課題も決して自然人類学が追求しているものと無縁なものではなく、むしろ問題を拡大したかの如き観をさえ呈している。すなわち“人類進化のコースは生物学的にも文化的にも何んであろうか”とか、“進化を支配する一般原則があるのか”、“過去と現在との関係問題”、“group 中の人間について如何なる一般化が作られ得るか”、“人間はどうして形成されるのか”、“訓練または必要性に応じて、周囲の圧力に適合するようにどの程度まで変形せしめ得られるか”、“何故ある社会では、ある personality の型が他の社会のそれより特徴的なのか”等……といった諸命題を担ってもある。従って O. Y. Gasset の言の如く“Man has no nature; he has history”ということが主

要な意義を持って来るのである。従って自然というものの代りに文化という概念で理解しようとする限り Tylor の示す如き指向となって来る。すなわち“今までの多くの nonsense は歴史の分野で理解されねばならないことを、理性とか理由の分野で理解しようとしたことにある”ということなのである。従って、自然人類学が認識—発見問題を中心命題として進むのに対し文化人類学は理解—発明問題を中心命題とした処がヨーロッパ人類学と異っているともいえよう。一つは発見の人類学に対し他は発明の人類学という言い方に通ずるものがある。此処に石器や青銅器があったとすると、一つはその年代や素材の出来具合、その物質形態的のものを中心として研究して行くに違いない、が他はそれが利用された背景、商品化した経済的生産としての意義といったものに目をつけるであろう。従って此処で再び問題提起がなされる。つまり“人間の制度、風俗、習慣の発展を揺り動かすのに自然身体的環境は如何程の potent (潜勢力) を持っているだろうか”ということや、“経済生産の様式は長い間において人々の考えを決定付けてしまうだろうか”及び“過去の過ちを避け、歴史の教訓から、どの程度学び取ることが出来るだろうか”とかいうことがそれである。とすれば文化というものの変化の仕方と成長の仕方が問題となって来るし変化は模倣と借りものを示し、成長は創造を意味しよう。R. B. Dixon はこの変容には必ず、Opportunity, need, 及び Genius の三つの要因があることを指摘している。日本の明治維新は外来船の寄港という刺戟による Opportunity があり、更に genius としては徳川三百年がもたらした社会階級別の結婚淘汰、特に血族結婚による淘汰作用によって、かなり資質的にはその素地が純化していたことは疑うべくもなく、ただ need において保守、革新の軋轢があっただけで、これも次第に前進的 motivation が強まって来たことは事実である。これと別な意味での変容が終戦後の日本においてなされていることは我々の等しく体験している処であろう。人類文化というものが総累積的であるといことは単独に発明発見されたものは、それ自体としての発展性に問題を残している。たとえば印度や中央アメリカにおいて見出された O の思考出現は未だ解決しない文化的現象であると言われている。このことは文化というものが general function として受け取られず special structure としての意義しか示され得ない処にも問題がある。人類先史学者が遺物を扱うまなさが単なる珍品主義的骨董センスから脱するか否かという態度にも係り合いを持っている。自然主義的概念は一つの意識内での循環過程の再編制に終ることが多いか、または固着化による安定性に結末をつけるかであろうが、人類生活という立場から見れば、その民族の生活体制が問題となろう。定着した生活様式は農耕文化を背景にしたものに多く見られていることや食物の種類にも関係している。現在までの研究資料ではある民族がそれ自体の特有の発明物質でのみ生きているというものは殆んどなく、自己本来の文化のみの利用率は10%とないことが明らかとなりつつある。文化の積畳性はそれ自体、細胞増殖変容にも似ている。現在の文明が遠くエジプト・バビロニアに負う処大といっても現在我々が活用しているものは十進法観念 (decimal notation) と水道管位のものではなかろうか、といっても文化の生産性の爆発的躍進というものは内面的な situation が熟して来ない限り如何なる型の外面的な刺戟や影響によっても起らないという Kroeber の説を否定することは出来ない。ということは期せずして、その第一原則は生体発展法則と同軌的のものの上にあるといえるのである。一般に宗教改革とか十字軍のような動きを単純に経済的理由に基づくものとされて割り切るようであるが、そういうこと自体が文化的でないのである。つまり economic とか religion というレッテル自体抽象的な置換言語でしかないのである。我々は今日カンガールという名前だと思い込まされている動物を實際見ており知っている。だがカンガールという表現はオーストラリアの土人語では“分らない”という意味の言葉である。レッテルをいくらつけてその本体は体験的なものでなければ把握出来ないものがある。それは“分ったような気持ちにさせる一つの記号”に過ぎないのである。

このようなことはよくある。“リウマチ”という病名もこれと同様の言葉である。このようなことを Whitehead は “The fallacy of misplaced Concreteness” (置換錯語) と呼んだのである。culture というものが総合積疊的本質を持っているにも拘らず, break-down されて行けば, それは文化孤立化を意味し, それは否応なしに secularization (世俗化) と individualization (個別化) に向わざるを得ないであろう。文化の代表的媒介体として言語があるとすれば, それは単なる文字ではない。それは哲学なのであり, それは同時に価値意識というものを帯同していなければ通じないのである。

斯く見て来ると人口資質面への接近問題として, 人口現象に対する見方の相違, 意義付けが異って来る。たとえば人口圧力は確かに migration を起す条件ではあるが, この migration の性格は任意な生物学的な気質の一つの表われではなく, 一つの selective character としての意義のものであり別の表現をすれば, 人口圧に対する反応型の一つとしての mode of adaptation を強制するということよりも, 逆に反応の可能性を制限するという逆速度性向を一般化するということが多きということの方が考えられ得るのである。生体の条件反射現象を見ても反復過度刺激は, その生体を眠りに導くであろう。

従って現代の科学第一主義に対し, 人類学からの批判があるわけで, たとえば Engineer は, 合理的な言葉で考え行動するかも知れない。しかし, その Engineer を含めて其処に働らく人々は彼等の生活文化として Non-rational な仕方でも反応していることを見逃すわけには行かないのである。Eliot Chapple の人類学者に与えた使命的役割は最もその核心をついている。

曰く“人類学者は利害打算, 判断決論を出すようには勉強していない筈である。人類学者はある事柄, 方法が導入された場合, どんなことが起るか人間関係について予告することにある”と, 従って急速な industrialization は必ず人間問題をひき起すし, またこの人間関係問題は自然科学の法則や経済学的理論で律し切れぬ歴史の重さを背負っている。またそういった問題本質として人口資質の諸面は其処に投げ出されているのではなからうか, それ故にこそ, 筆者が「人口問題研究, 第93号」に「人然界」という組織体系を示したのであり, 人口資質の転換爆発という杞憂を訴えるのも決して偶然の概念からではないことを付言するに止めたい。

4) むすび

人口資質面に関する人類学的研究が今までになかったわけではない。「人類学, 先史学講座」の中に既に多くの先駆的研究論文を見ることが出来るが, 中でも北村直躬氏の「人種生理学」や小山栄三氏の「政治人類学」内海義夫氏の「社会生物学」の論文などは出色なものといってよい。また外国でも, Peter Ramneantz 氏の “Biotype and fertility of women from the province of Banat (Rumania) (1937)” の研究や, R. Ritter 氏の “Mitteleuropäische Zigeuner” 中の “Ein Volkstamm oder eine Mischlingspopulation” (1937) また Robert Gessain のエスキモーの研究 Mile de Bestrange の研究なども人口資質の人類学といってよいものである。この外 Wayne state 大学刊行の “Human Biology” に載せられる論文など凡て参考になる。出生死亡が常に離れられざる生物現象として認識されている如く truth, beauty というものが分ちがたい根本的な文化現象としての認識の上にたてられることが大切であろう。Kluckhohn は人類学者の義務として, mental force についても physical force と同様に触知し得られる効果を持っていることを指摘することであるといっているが, 生活人類学は自明の生活の仕方そのものに対する挑戦であるといえる。つまり分り切っていると思っている事に対する研究学問への道である。まさに “Anthropology is no longer just the science of the long-ago and far-away” ということが古くて新しい生活人類学の含意でもある。た

たとえば女性における月経という事実は人類が生存した時よりあったに違いないが、これも平均12~13歳前後に現象として始ること、更にその生活環境によって若干異って発現することなどもつい最近はっきりして来たことである。すなわちロンドンでは13.1歳、コペンハーゲンでは13.8歳、オランダでは13.6歳、ブタペストで12.8歳、ポーランドでは12.6歳、日本では13歳である。以上の生物学的な基本構造を中心とする生活現象でさえも社会生活の上から振り分けられて行く生体構造、たとえば職業によって選択されたかの如き身長の変異などその例に洩れまい。人口問題研究所で行った労働力資質の調査による鉄鋼業従事者男子の平均身長が $163.2\text{cm} \pm 0.07$ 、卸売小売業者 $166.4\text{cm} \pm 0.10$ 、平地農業者 $162.1\text{cm} \pm 0.12$ 、山地農業者 $161.3\text{cm} \pm 0.11$ を示している事実や、また妊娠、出産数にしても1生を通じ0から27までの格差が現実には生物学的には存在しているにも拘らず受胎調節その他の調整によって平準化し、この上限数が縮小していることなどは一つの文化的選択現象として見られないことではないのである。これら意識、無意識を問わず、調整能力の問題こそが実は生活人類学的研究対象となり得るわけであるが、この変異性の故にこそ、即ち如何なる個体も厳密に言って同じものはないしまた如何なる個体も人生を通じて二つのmomentに対して同一ではないという生物学的の基本原則の上にこそその存在意義が可能なのである。たとえば遺伝子というものが32あただけでもその phenotype は46億という多きに達しこれは世界人口をはるかに越えた数でさえある。従って adaptation と adjustment を生物学的の基本原則を背景として探求することによって人口資質というものの全貌と動向を捕え、その意義と価値付けを行うことが中心課題となって来るのである。しかし、Bertrand Russell の言の如く “ascertainable truth is piece-meal, partial uncertain and difficult……” であるかも知れない。問題は常に問題そのものの認識と同時に問題処理に対する frame reference の発見発明でなければならないであろう。最後に人口資質研究への生活人類学の分野と構想の最小限界を次の如く述べて結語としたい。

1) 基礎的研究分野

人類遺伝学, 生理人類学, 骨格人類学, 人類生態学, 栄養体構論, 生化学人類学, 人類学的哲学

2) 実地的研究分野

生体人類学, 運動機能論, 適応変異論, 労働人類学, 性人類学 (家族計画を含む)

人類心理学, 人口動態論, 優生優境論 (血族結婚を含む)

Life-Anthropological Conception and Its Vision around
Problems of Population Quality : An Approach
from the Viewpoints of Physical and
Cultural Anthropology

NOBUO SHINOZAKI

Here I would like to be going to research a theme of contact to problems of population quality by approaching from the field of physical and cultural Anthropology. In order to promote this division, as a premise, I must review the system of existing Anthropology and the language or word of human beings itself; especially the Japanese word “Jinrui”. In Japan I find this expression “Jinrui (human beings' word)” would be

at first seen in old scroll scripture in which this word was used as an explanation of many various picture of person at Nagasaki about 1650.

Since the Section of Anthropology was organized in the British Association for the advancement of science 1822, in Japan the Anthropological Society was established at Tokyo 1884. Accordingly the main current of Anthropology in Japan have been influenced by the European-Anthropology particularly the German Physical Anthropology. Now we shall have more than 42 Associations around Anthropology in a world, but most idea of tasks or rasearches seem to be belonging to rather the study of old society, otherwise interesting in remains except a few of study concerning a living man, much less in population quality.

Kluckhohn's proposal "Anthropology is no longer just the science of the long-ago and far-away" may indicate a new direction of composition to the idea of life-Anthropology and also we have already researched in the field of "ergology".

If Anthropology consist in the definition "Science of Man", and must be studied centering around an object of man himself, whatever the entrance of research may be physical or cultural, I suppose we should be inevitably to ought to have many problems in common with both divisions and that the fruits must be evaluated in the real fact or actual truth concerning "Man" in the long run. Of course we have found many findings or knowledges around human ; for instance, special features of mankind ; namely ability of joining five fingers together, number and direction of path of a nerve in mandible, complete building up of the diaphragm, custom of obligatory, and offering, idea of average man and etc. It goes without saying that these above-mentioned traits survive through a long historical living way of mankind by selection, adaptation, adjustment, mutation and so on.

Therefore I suppose it might be well permitted that the conception of Life-Anthropology will be able to be constituted and conceived reasonably as the contact field to problems of population quality.

In such fields of research nobody had not necessarily studied as an Anthropologist under such a ideology in past. I could recall several pioneer-researchers named R. Ritter, R. Gessain, Mile de Bestrange and a few Japanese researchers.

In conclusion I should like to stop my saying by stating my idea of system concerning Life-Anthropology as follows.

1) Fundamental branch of this research

Human Genetics, Physiological Anthropology, Osteological Anthropology, Human Ecology, Nutrition Anthropology, Biochemical Anthropology, Anthropological Philosophy.

2) Actual branch of this research

Somatology, Labour Function Research, Adaptability Variability Research, Ergology, Sexual Anthropology (includ family planning), Psychological Anthropology, Vital Demography, Eugenic-Euthenic Research (include mixture, inbreeding marraige etc.).

Even though "the ascertainable truth is piece-meal, partial, uncertain and difficult" by Bertrand Russell's advise, human beings are now living here actully before our eyes.